博士論文(要約)

論文題目　日本近代哲学における「個人」と「社会」
―西田幾多郎と三木清の比較から―

氏 名　　西塚　俊太

【目次】

序……1

第一章　三木清の思想における社会の位置と意義……7

第一節　「形成的世界の形成的要素」論という課題……7

第二節　「ひと」と「閉じた社会」……9

第三節　「私と汝」と「開いた社会」……16

第四節　「形成的世界の形成的要素」論における社会の位置と意義……22

第二章　西田幾多郎の自発自展する思想と文体……27

第一節　「真の無」「絶対の無」をめぐる考察……27

第二節　自発自展する思想……29

第三節　自発自展する文体……35

第四節　西田哲学を論じるという営為……42

第三章　「創造的世界の創造的要素」としての「人間的存在」……47

第一節　「創造的世界の創造的要素」論という課題……47

第二節　西田幾多郎の歴史論の問題性……49

第三節　「私」と「汝」であること……54

第四節　「私と汝」から歴史へ……59

第五節　「人間的存在」であること……64

第六節　「人生の悲哀」と「永遠の今」の歴史論の交点……68

第四章　三木清の「人間学」……74

第一節　三木清の社会論が内包する課題……74
第二節　「人間学」のマルクス的形態……77
第三節　『パスカルに於ける人間の研究』から『歴史哲学』へ……83
第四節　「ひと」であること・「私と汝」であること・「主体」であること……94
第五節　人間の構想力と自然の構想力……106
第六節　遺稿「親鸞」の位置……117

結……130

注……135

参考文献……147

序

西田幾多郎が石川県河北郡宇ノ気村に生まれたのは、明治三[１８７０]年のことであった。これに対して、後に西田の教えを受けることになる三木清が兵庫県揖保郡平井村に生を受けたのは、明治三十[１８９７]年のことである。つまり、西田と三木という師弟の間には、二十七年の歳の開きが存在しているということになる。そしてこの二十七年という年月は、両者の哲学・思想の間に質的な相違を生み出すことになった。本稿は、西田哲学と三木の思想との間にある相違に注目し、両者を対比的に検討することを通じて、日本近代哲学・思想の中で「個人」が「社会」や世界の形成に対して如何に位置付けられていたのか、つまり日本近代哲学・思想における「個人」像の一端を明らかにすることを主たる目的としている。

※論文「三木清の主体概念の研究のために」『倫理学紀要第二十一輯』(東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、二〇一四年、一一一-一一五頁)において既に発表されているため省略

ここで本稿の構成を通覧しておくと、以下のようになる。

第一章では、三木の「形成的世界の形成的要素」論が、個としての人間と社会との相互形成関係を主として論じた上で、その形成関係を媒介とすることで人間と世界との関係性を指し示すものであることを明らかにする。すなわち、西田哲学においては自己の形成と世界の形成とが「即」という語で結ばれているのに対して、三木の論理においては個としての人間と世界とを媒介する社会の形成が重視されていることの意義と意味を検討していく。

第二章の考察は、「純粋経験」の思想から「場所」の思想へと至る初期から中期の西田哲学が、無限に自己展開していく「自覚の体系」の論理化を目指したものであることを示すことになる。この章における考察は西田哲学の特徴が「自発自展する思想と文体」という点に存在することを明らかにしていくが、これは第一章で明らかにされた三木の思想における社会の媒介の重視という特徴と対比するに際して重要となるものである。

第三章では、一九三〇年代の西田の論考を中心的に検討することを通じて、まず西田の歴史論の論理構制とその問題性を示した上で、その歴史論と「私と汝」論との交点を跡付けていく。ついで「真の我」「真の自己」が「創造的世界の創造的要素」とし

て捉えられるそのゆえんを明らかにし、西田の哲学が「人生の悲哀」と深く結び付いたものであることを示すことになる。

第四章における考察は、三木の歴史論と社会論の検討を通じて、三木の思想が一貫して「人間学」という主題を扱うものであったことを示していくことになる。この章における考察により、『哲学的人間学』『哲学入門』『構想力の論理』などの著作の中で示されている三木の後期思想が、「主体」としての人間のあり様を論じるものである一方で、社会の独立をも基礎付けてしまう危険性を含んだものであったことが確認される。そして最終的に、三木の個人と社会に関する思想と死生観との結び付きが示されることになる。

第一章　三木清の思想における社会の位置と意義

※論文「三木清における社会の位置―「形成的世界の形成的要素」論をめぐって―」『倫理学年報第五十七集』(日本倫理学会、二〇〇八年、二九一 - 三〇五頁)において既に発表されているため省略

第二章　西田幾多郎の自発自展する思想と文体

※論文「自発自展する思想と文体―西田幾多郎の自覚の体系と「真の無」「絶対の無」をめぐる考察―」『倫理学紀要第十六輯』(東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、二〇〇九年、一六二 - 一八四頁)において既に発表されているため省略

第三章　「創造的世界の創造的要素」としての「人間的存在」

第一節　「創造的世界の創造的要素」論という課題
第二節　西田幾多郎の歴史論の問題性
第三節　「私」と「汝」であること
第四節　「私と汝」から歴史へ
第五節　「人間的存在」であること

※論文「「創造的世界の創造的要素」としての「人間的存在」―西田幾多郎の歴史論をめぐって」『西田哲学会年報第九号』(西田哲学会、二〇一二年、一一九 - 一三四頁)において既に発表されているため省略

第六節　「人生の悲哀」と「永遠の今」の歴史論の交点

第一章において確認したように、三木は社会について次のように論じている。

> ひとのする通りにする者は「世の中」のする通りにする者である。ひとの考えるように考える者は「世間」の考えるように考える者である。このように、ひとはまた世の中とか世間とかを、その意味に於て社会を意味する。人間という語は語学的に云ってももと世間とか世の中とかいう意味をもっている。かようにして「ひと」という概念が既に両義的である。それは「誰か」という意味で或る個人性を含み、同時にそれは世間という意味で或る社会性を含んでいる。(M十八:366)

この引用に見られるように、我々が日常生活を営んでいる社会というものは、非人称的な存在である「ひと」によって形成されているものと考えられる。世界に存在する個物と個物はある時「私と汝」として出会うことになるが、そこで出会われた「私と汝」は時の経過とともに、次第に日常的なあり様に溶け込んでいくことになるだろう。これはすなわち、「私と汝」が再び個物のひとつへと、言い換えるなら「ひと」のひとりへと帰りゆくということでもあり、これこそ「私と汝」の出会いから社会が新たなものへと形成されていくということを意味するのである。社会の成立は、「私と汝」が有する唯一性の喪失を意味しているとも言えるだろう。

そしてこの事情は、「私と汝」の外に「彼」(N七:314 他)というような第三項を導入

しても変化することがない。「私」なり「汝」なり「彼」なりが、意味連関や行為連関の中に含まれるひとつの項とならない限り、「私」「汝」「彼」は社会を形作っているものとみなされないだろう。要するに、並列的な個物の単なる多数性によっては、社会や歴史は成立し得ないのである。これは換言すると、社会を論じる営為は意味連関・行為連関に関する具体的な考察と不可分だということでもある[1]。

また同様のことが、歴史についても当てはまるのではないだろうか。個物と個物の並列のみによっては歴史が成立しないのはもちろんのこと、個物と個物が「私と汝」として出会うことだけでも、いまだ歴史の成立には至らないことだろう。個物と個物が「私と汝」となり、その「私と汝」が再び個物へと帰っていくことによって歴史は成立するように思われる。一般的に歴史学は個性記述を目的にするものとも言われるが、言語のもとに云い取られた個性は、もはやこの「私」・この「汝」ではない。歴史物語の中に描かれる「源義経」は、一一八五年に一ノ谷・屋島・壇の浦の合戦で平氏を滅亡させた源義経その人ではなく、また、歴史上いわゆる「関ヶ原の戦い」と呼ばれている戦は、当然、一六〇〇年に関ヶ原で実際に行われた諸々の戦闘行為をそのまま全て写し取ったものではない。歴史の年表上に登場する人物や出来事は、把握されて書きとめられ、余剰を削られ細部を補われ、単純化されて形を整えられた、固形化した人物像・止まった時間である。

すなわち、唯一的な存在や一回的な出来事が反復可能な型として社会的な連関の中に位置付くことで、歴史というものが成立するのである。そしてそれ故に、「永遠の今」や「絶対現在」の自己限定の論理に立脚し、「非連続の連続」という形で「私」と「汝」の独立性を強調する西田の論考は、社会や歴史を捉えきれないものと考えられるのである。

※論文「人生の悲哀と「永遠の今」の歴史論の交点―西田幾多郎の死生観をめぐって」『死生学研究第一三号』(東京大学大学院人文社会系研究科、二〇一〇年、一〇四‐一二六頁)において既に発表されているため省略

第四章　三木清の「人間学」

第一節　三木清の社会論が内包する課題

第二節　「人間学」のマルクス的形態

第三節　『パスカルに於ける人間の研究』から『歴史哲学』へ

※解説論文「三木清「人間学のマルクス的形態」」熊野純彦編・共著『日本哲学小史―近代一〇〇年の二〇篇』(中央公論新社、中公新書、二〇〇九年、二七二-二七九頁)、および論文「三木清の主体概念の研究のために」『倫理学紀要第二十一輯』(東京大学大学院、人文社会系研究科倫理学研究室、二〇一四年、一一六-一三〇頁)においてすでに発表されているため省略

とは言えひとまずここで本節を閉じ、次節の検討によって三木の思想における「主体」概念とはいかなるものであるのかを明らかにしていくことにしたい。その検討により我々は、三木の思想において「個人」と「社会」とが密接に結び付いたものとして想定されていることを確認することになるだろう。

第四節　「ひと」であること・「私と汝」であること・「主体」であること

本節における考察は、三木清の思想における「主体」概念の把握を主たる目的としている。ここでいう三木の主体概念とは、例えば『哲学入門』(昭和十五[１９４０]年)の中で次のように表現されているもののことを意味している。

> 人間と環境との関係はもと行為の関係であり、行為の立場においては、働くものは単なる意識でなく身体を具えた人間である。行為は意識の内部におけることでなく、行為するとは却って意識から脱け出ることであり、我々が意識から脱け出るのは身体に依ってである。……行為については、ひとは行為の主観とはいわず主体といっている。かように何よりも行為の立場において形作られる主体の概念は、従来の主観の概念とは区別さるべき理由があるであろう。我々は主体として単なる意識でなく存在である。(M七:12-13)

単なる意識ではなく身体を具えて行為する存在であることが、「従来の主観の概念とは区別さるべき」ものとして、主体という概念を特徴付けている。三木の主体概念は、

大正十一[１９２２]年の論文「個性の問題」において早くもその使用がみとめられるが、そこではすでに、「個性は個々の行為の有機的統一或いは創造的綜合の上に成立するのであり、一々の行為はそれの源である主体の全体の意味をつねに現実に現わしているもの、そしてそれ故に主体との具体的個性的関係に於て評価さるべきものである」（Ｍ二:145)というように、行為との関係から主体という概念が説き出されている[2]。この点において三木の主体概念は、西田が論文「私と汝」（昭和七[１９３２]年)において提示しているような、「精神」の側面と「身体」の側面の両面を有する存在として人間を捉える発想を先取りするものであったと言えるだろう。

※論文「三木清における社会の位置―「形成的世界の形成的要素」論をめぐって―」『倫理学年報第五十七集』(日本倫理学会、二〇〇八年、二九一 - 三〇五頁)において既に発表されているため省略

第五節　人間の構想力と自然の構想力

※「５年以内に出版予定」の箇所であるため省略

第六節　遺稿「親鸞」の位置

※論文「三木清における遺稿「親鸞」の位置付け」『日本思想史学第四十号』(日本思想史学会、二〇〇八年、一一六 - 一三四頁)においてすでに発表されているため、および「５年以内に出版予定」の箇所であるため省略

結

三木清に哲学の道を歩むことを決心させたのは、西田幾多郎の処女作『善の研究』(明治四十四[１９１１]年)との出会いであった。

※「５年以内に出版予定」の箇所であるため省略

註

[1] この点について城塚登は、「西田博士の構想は、一般者と個物との相互限定がおこなわれる具体的な社会集団のあり方についての理解が不足している」と指摘している(城塚登「西田哲学との再会」旧版『西田幾多郎全集』「月報第四」、七頁。後に下村編前掲『西田幾多郎―同時代の記録―』二三四頁に再掲)。

同様の指摘は、小坂前掲『西田幾多郎をめぐる哲学者群像』の中で、「たしかに西田は「私と汝」の対話や応答ということを強調し、「個物と個物の相互限定」ということを繰りかえし主張している。しかしながら、他の箇所でも触れたように、その叙述は具体性に欠け、抽象的な叙述にとどまっている」(四三頁)と、あるいは、「私と汝の対話とか、個物と個物の相互限定とかいいながら、それは一般論の域を一歩も出ることなく、抽象的な議論に終始しているのである。……少なくとも通常いうような意味での社会的実践、あるいは歴史的実践の観念が欠如している」(四四頁)と繰り返されている。

[2] 小林敏明は三木による主体概念の使用について、「これが京都学派の周辺で「主体」という言葉が人間的個人を暗示しながら「行為の源」という意味をもって意図的につかわれた最初の例であると思われる」(『〈主体〉のゆくえ―日本近代思想史への一視角―』(講談社、二〇一〇年)、九〇頁、傍点原文)と述べている。いわゆる京都学派とその影響下にあった思想家達の間での主体概念の使用状況については今後さらなる検討が必要であるが、少なくとも、三木の発想が論文「私と汝」において示されている西田の発想を一定程度先取りするものであったことは確かであろう。

【参考文献（著者五十音順）】

・西田幾多郎の著作からの引用は全て『西田幾多郎全集』（岩波書店、一九六五‐一九六六年）による。
・三木清の著作からの引用は全て『三木清全集』（岩波書店、一九六六‐一九六八年。ただし、全集第二十巻のみ一九八六年）による。

饗庭孝男『経験と超越―日本「近代」の思考―』（小沢書店、一九八五年）
赤松常弘『三木清―哲学的思索の軌跡―』（ミネルヴァ書房、一九九四年）
――「三木清の哲学」藤田正勝 編『京都学派の哲学』（昭和堂、二〇〇一年）
秋富克哉「作るということ―「創造的」純粋経験からの展開―」『理想　六八一号』（理想社、二〇〇八年）
浅見洋『西田幾多郎とキリスト教の対話』（朝文社、二〇〇〇年）
――『二人称の死―西田・大拙・西谷の思想をめぐって―』（春風社、二〇〇三年）
――『西田幾多郎―生命と宗教に深まりゆく思索―』（春風社、二〇〇九年）
天野貞祐他『西田幾多郎とその哲学』（一燈園 燈影舎、一九八五年）
荒川幾男『三木清』（紀伊國屋書店、一九六八年）
荒谷大輔『西田幾多郎―歴史の論理学―』（講談社、二〇〇八年）
家永三郎『日本近代思想史研究』（東京大学出版会、一九五六年）
石田雄『明治政治思想史研究』（未来社、一九五四年）
磯谷孝「日本思想における「永遠の今」―無の場所とシニフィアンス―」上田閑照編『西田哲学―没後五十年記念論文集―』（創文社、一九九四年）
板橋勇仁『西田哲学の論理と方法―徹底的批評主義とは何か―』（法政大学出版局、二〇〇四年）
――板橋勇仁『歴史的現実と西田哲学―絶対的論理主義とは何か―』（法政大学出版局、二〇〇八年）
伊藤徹 編『作ることの日本近代―一九一〇―四〇年代の精神史―』（世界思想社、二〇一〇年）
井上克人「時と鏡―西田哲学に於ける実在の論理―」『西田哲学会年報　第六号』（西

田哲学会、二〇〇九年）
今井弘道『三木清と丸山真男の間』（風行社、二〇〇六年）
岩崎稔「生産する構想力、救済する構想力―ハンナ・アーレントへの一試論―」『思想第八〇七号』（岩波書店、一九九一年）
上田閑照『生きるということ―経験と自覚―』（人文書院、一九九一年）
――『西田幾多郎を読む』（岩波書店、一九九一年）
――『西田哲学への導き―経験と自覚―』（岩波書店、一九九八年）
――『西田幾多郎とは誰か』（岩波現代文庫、二〇〇二年）
上田閑照 編『西田哲学への問い』（岩波書店、一九九〇年）
――『西田哲学―没後五十年記念論文集―』（創文社、一九九四年）
植手通有『日本近代思想の形成』（岩波書店、一九七四年）
上村武男『西田幾多郎 過程する球体―『善の研究』論―』（行路社、一九八八年）
上山春平『日本の土着思想―独創的なリベラルとラディカル―』（弘文堂、一九六五年）
――『日本の思想―土着と欧化の系譜―』（サイマル出版会、一九七一年）
内田弘『三木清―個性者の構想力―』（御茶の水書房、二〇〇四年）
宇都宮芳明・熊野純彦 編『倫理学を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九四年）
大橋良介『西田哲学の世界―あるいは哲学の転回―』（筑摩書房、一九九五年）
大橋良介「歴史と身体―西田哲学の歴史思惟(二)―」『理想 六八一号』（理想社、二〇〇八年）
大橋良介 編『京都学派の思想―種々の像と思想のポテンシャル―』（人文書院、二〇〇四年）
大庭健『他者とは誰のことか―自己組織システムの倫理学―』（勁草書房、一九八九年）
――『権力とはどんな力か―続・自己組織システムの倫理学―』（勁草書房、一九九一年）
――『自分であるとはどんなことか―完・自己組織システムの倫理学―』（勁草書房、一九九七年）
大峯顯「悲哀と意識―西田哲学における情意的なものについて―」上田閑照編『西田哲学への問い』（岩波書店、一九九〇年）
――『宗教と詩の源泉』（法蔵館、一九九六年）

大峯顯 編『西田哲学を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九六年)
岡田勝明『フィヒテと西田哲学—自己形成の原理を求めて—』(世界思想社、二〇〇〇年)
小川圭治「西田哲学とキリスト教」上田閑照編『西田哲学への問い』(岩波書店、一九九〇年)
片柳榮一「一到達点としての「私と汝」—人格をめぐる西田の思索—」『西田哲学会年報 第九号』(西田哲学会、二〇一二年)
嘉戸一将『西田幾多郎と国家への問い』(以文社、二〇〇七年)
神川正彦『歴史における言葉と論理Ⅰ・Ⅱ』(勁草書房、一九七〇-一九七一年)
神島二郎『近代日本の精神構造』(岩波書店、一九六一年)
亀山純生「三木『親鸞』の〝再発見〟—解釈学が拓く親鸞論の地平と宗教論的・思想的意義—」『遺産としての三木清』(同時代社、二〇〇八年)
茅野良男・大橋良介 編『西田哲学—新資料と研究への手引き—』(ミネルヴァ書房、一九八七年)
茅野良男・藤田正勝 編『転換期としての日本近代—日本人が体験した歴史からの思考—』(ミネルヴァ書房、一九九九年)
唐木順三『三木清』(筑摩書房、一九四七年)
———『新版 現代史への試み』(筑摩書房、一九六三年)
菅野覚明『詩と国家—「かたち」としての言葉論—』(勁草書房、二〇〇五年)
菊谷和宏『「社会」の誕生—トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンの社会思想史—』(講談社選書メチエ、二〇一一年)
木前利秋「構想力・神話・形の論理—『構想力の論理』再考—」『思想 第八〇七号』(岩波書店、一九九一年)
清眞人・津田雅夫・亀山純生・室井美千博・平子友長『遺産としての三木清』(同時代社、二〇〇八年)
清眞人「「東洋的自然主義」批判と主体の自己創造」『遺産としての三木清』(同時代社、二〇〇八年)
———「三木パトス論の問題構造」『遺産としての三木清』(同時代社、二〇〇八年)
久野収『三〇年代の思想家たち』(岩波書店、一九七五年)

熊谷征一郎「西田哲学における他者の隔絶性―レヴィナスとの比較において」日本哲学史フォーラム 編『日本の哲学 第六号』(昭和堂、二〇〇五年)
黒住真 編著『思想の身体 徳の巻』(春秋社、二〇〇七年)
氣多雅子『西田幾多郎『善の研究』』(晃洋書房、二〇一一年)
『現代思想 一九九三年一月号 特集 西田幾多郎』(青土社、一九九三年)
高坂史朗『実践哲学の基礎』(創元社、一九八三年)
高坂正顕『西田幾多郎先生の追憶』(國立書院、一九四八年)
――『西田幾多郎と和辻哲郎』(新潮社、一九六四年)
――『西田幾多郎先生の生涯と思想』(創文社、一九七一年)
高山岩男『西田哲学とは何か』(一燈園 燈影舎、一九八八年)
小坂国継『西田哲学の研究―場所の論理の生成と構造―』(ミネルヴァ書房、一九九一年)
――『西田哲学と宗教』(大東出版社、一九九四年)
――『西田幾多郎―その思想と現代―』(ミネルヴァ書房、一九九五年)
――『西田幾多郎をめぐる哲学者群像―近代日本哲学と宗教―』(ミネルヴァ書房、一九九七年)
――『西田幾多郎の思想』(講談社学術文庫、二〇〇二年)
――『西田哲学を読む1～3』(大東出版社、二〇〇八-二〇〇九年)
――「西田哲学の基層」『理想 第六八一号』(理想社、二〇〇八年)
――『西田哲学の基層―宗教的自覚の論理―』(岩波現代文庫、二〇一一年)
小谷汪之『歴史の方法について』(東京大学出版会、一九八五年)
小林敏明『西田幾多郎 他性の文体』(太田出版、一九九七年)
――『西田幾多郎の憂鬱』(岩波書店、二〇〇三年)
――「偶然性の時間論―九鬼周造から西田幾多郎へ―」『思想 第一〇一九号』(岩波書店、二〇〇九年)
――「カイロスの系譜―西田幾多郎「永遠の今」をめぐって―」『思想 第一〇三一号』(岩波書店、二〇一〇年)
――『〈主体〉のゆくえ―日本近代思想史への一視角―』(講談社、二〇一〇年)
坂部恵「西田哲学の文体をめぐって」『思想 第八五七号』(岩波書店、一九九五年)

向坂逸郎 編著『近代日本の思想家』(和光社、一九五四年)
桜井哲夫『「近代」の意味―制度としての学校・工場―』(日本放送出版協会、一九八四年)
佐々木健『三木清の世界―人間の救済と社会の変革―』(第三文明社、一九八七年)
佐藤信衛『西田幾多郎と三木清』(中央公論社、一九四七年)
佐藤正英『日本倫理思想史 増補改訂版』(東京大学出版会、二〇一二年)
佐藤正英・野崎守英 編『日本倫理思想史研究』(ぺりかん社、一九八三年)
佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代―目的論の新たな可能性を求めて―』(岩波書店、二〇〇五年)
――「「かたち」と「おのずから・みずから問題」―三木清によせて―」竹内整一・金泰昌 編『「おのずから」と「みずから」のあわい―公共する世界を日本思想にさぐる―』(東京大学出版会、二〇一〇年)
ジェームズ・ハイジック『『善の研究』と西田哲学における失われた場所』藤田正勝 編『『善の研究』の百年―世界へ／世界から』(京都大学学術出版会、二〇一一年)
『思想 第八〇七号 構想力』(岩波書店、一九九一年第九号)
『思想 第八五七号 西田幾多郎 歿後五〇年』(岩波書店、一九九五年第一一号)
『実存思想論集XVII 近代日本思想を読み直す』(理想社、二〇〇二年)
下村寅太郎『若き西田幾多郎先生―『善の研究』の成立前後―』(人文書林、一九四七年)
――『西田哲学』(白日書院、一九四七年)
――『西田幾多郎 人と思想』(東海大学出版会、一九六五年)
下村寅太郎 編『西田幾多郎―同時代の記録―』(岩波書店、一九七一年)
城塚登「西田哲学との再会」(旧版『西田幾多郎全集』「月報第四」)
末木剛博『西田幾多郎 その哲学体系Ⅰ～Ⅳ』(春秋社、一九八三-一九八八年)
末木文美士『近代日本と仏教―近代日本の思想・再考Ⅱ―』(トランスビュー、二〇〇四年)
菅原潤『昭和思想史とシェリング』(萌書房、二〇〇八年)
杉本耕一「田辺元の「種の論理」と西田哲学」日本哲学史フォーラム 編『日本の哲学第三号』(昭和堂、二〇〇二年)

鈴木正・卞崇道 編著『近代日本の哲学者』(北樹出版、一九九〇年)
鈴木亨『実存と労働』(ミネルヴァ書房、一九五八年)
――『西田幾多郎の世界』(勁草書房、一九七七年)
高桑純夫『三木哲学―哲学の本質への反省―』(夏目書店、一九四六年)
瀧澤克巳『西田哲学の根本問題』(清水書房、一九四六年)
竹内整一『自己超越の思想―近代日本のニヒリズム―』(ぺりかん社、一九八八年)
――『「かなしみ」の哲学―日本精神史の源をさぐる―』(ＮＨＫブックス、二〇〇九年)
竹内整一・金泰昌 編『「おのずから」と「みずから」のあわい―公共する世界を日本思想にさぐる―』(東京大学出版会、二〇一〇年)
竹内良知『西田幾多郎』(東京大学出版会、一九七〇年)
――『西田幾多郎と現代』(第三文明社、一九七八年)
――『西田哲学の「行為的直観」』(農山漁村文化協会、一九九二年)
竹内良知 編『昭和思想史』(ミネルヴァ書房、一九五八年)
竹田篤司『西田幾多郎』(中央公論社、一九七九年)
――『物語「京都学派」』(中公叢書、二〇〇一年)
竹花洋佑「ヘーゲル判断論と西田哲学」『西田哲学会年報 第四号』(西田哲学会、二〇〇七年)
田中久文「虚無からの形成力―三木清における「構想力」論―」日本哲学史フォーラム 編『日本の哲学第2号』(昭和堂、二〇〇一年)
――「京都学派の遺産―その多様性と現代性―」実存思想協会 編『実存思想論集XVII』(理想社、二〇〇二年)
――『丸山真男を読みなおす』(講談社、二〇〇九年)
――「京都学派の他者論―和辻・三木・西田―」竹内整一・金泰昌 編『「おのずから」と「みずから」のあわい―公共する世界を日本思想にさぐる―』(東京大学出版会、二〇一〇年)
田中裕「無の場所と人格―西田哲学とキリスト教の接点―」『理想 第六八一号 特集 西田哲学の諸問題』(理想社、二〇〇八年)
谷川徹三・東畑精一編『回想の三木清』(文化書院、一九四八年)

津田雅夫『文化と宗教―近代日本思想史序論―』(法律文化社、一九九七年)
――『人為と自然―三木清の思想史的研究―』(文理閣、二〇〇七年)
――「「第三の弁証法」について―その成立根拠をめぐって―」『遺産としての三木清』(同時代社、二〇〇八年)
――『戸坂潤と〈昭和イデオロギー〉―「西田学派」の研究―』(同時代社、二〇〇九年)
――『「もの」の思想―その思想史的考察―』(文理閣、二〇一一年)
綱澤満昭『日本近代思想の相貌―近代的「知」を問いただす―』(晃洋書房、二〇〇一年)
常俊宗三郎 編『日本の哲学を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九八年)
『点から線へ　第四六号』(石川県西田幾多郎記念哲学館、二〇〇五年)
戸坂潤『日本イデオロギー論』(岩波文庫、一九七七年)
中岡成文『私と出会うための西田幾多郎』(出窓社、一九九九年)
中川久定「西田幾多郎の哲学と文体―上田閑照編『西田哲学』の読後に―」『創文』(創文社、一九九四年)
永井均『西田幾多郎―〈絶対無〉とは何か』(ＮＨＫ出版、二〇〇六年)
長尾訓孝『西田哲学の解釈』(理想社、一九六〇年)
永野基綱『三木清』(清水書院、二〇〇九年)
夏目漱石『吾輩は猫である』(岩波文庫、一九九〇年)
『西田幾多郎―永遠に読み返される哲学―』(河出書房新社、二〇〇五年)
西田記念館 編『西田哲学を語る―西田幾多郎没後五〇周年記念講演集―』(燈影舎、一九九五年)
『西田哲学会年報　第一号 - 第九号』(西田哲学会、二〇〇四 - 二〇一二年)
新田義弘『現代の問いとしての西田哲学』(岩波書店、一九九八年)
日本哲学史フォーラム 編『日本の哲学　第一号 - 第十二号』(昭和堂、二〇〇〇 - 二〇一一年)
日本倫理学会 編『近代日本における国家と倫理』(慶應通信、一九八七年)
貫成人『歴史の哲学―物語を超えて―』(勁草書房、二〇一〇年)
沼田滋夫『西田哲学への旅―哲学と宗教との接点を追って―』(北樹出版、一九八四年)

――「西田哲学の宗教的性格について」上田閑照 編『西田哲学への問い』(岩波書店、一九九〇年)
橋本峰雄「西田幾多郎―「なければならない」のロジック・グラマー・レトリック―」『思想の科学』(思想の科学社、一九六九年)
長谷正當「西田哲学と浄土教」大峯顯 編『西田哲学を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九六年)
服部健二『西田哲学と左派の人たち』(こぶし書房、二〇〇〇年)
服部之総『親鸞ノート』(福村出版、一九七〇年)
花岡永子『絶対無の哲学―西田哲学研究入門―』(世界思想社、二〇〇二年)
尾藤正英『江戸時代とはなにか―日本史上の近世と近代―』(岩波現代文庫、二〇〇六年)
平山洋『西田哲学の再構築―その成立過程と比較思想―』(ミネルヴァ書房、一九九七年)
藤田健治『西田幾多郎　その軌跡と系譜―哲学の文学的考察―』(法政大学出版局、一九九三年)
藤田正勝『現代思想としての西田幾多郎』(講談社選書メチエ、一九九八年)
――『西田幾多郎の思索世界―純粋経験から世界認識へ―』(岩波書店、二〇一一年)
藤田正勝 編『日本近代思想を学ぶ人のために』(世界思想社、一九九七年)
――編『京都学派の哲学』(昭和堂、二〇〇一年)
――編『『善の研究』の百年―世界へ／世界から―』(京都大学学術出版会、二〇一一年)
船(舩)山信一『日本の観念論者』(英宝社、一九五六年)
――『明治哲学史研究』(ミネルヴァ書房、一九五九年)
――『大正哲学史研究』(法律文化社、一九六五年)
――『昭和唯物論史　上・下』(福村出版、一九六八年)
――『ヘーゲル哲学と西田哲学』(未来社、一九八四年)
――『日本哲学者の弁証法』(こぶし書房、一九九五年)
卞崇道「三木清」鈴木正・卞崇道 編著『近代日本の哲学者』(北樹出版、一九九〇年)
細谷昌志「直観と論理―西田・田辺論争が問うもの―」日本哲学史フォーラム 編『日

本の哲学　第十号』（昭和堂、二〇〇九年）
松田宏一郎『江戸の知識から明治の政治へ』（ぺりかん社、二〇〇八年）
松本三之介『明治思想における伝統と近代』（東京大学出版会、一九九六年）
――『明治思想史―近代国家の創設から個の覚醒まで―』（新曜社、一九九六年）
溝口宏平「西田哲学とハイデガー哲学」大峯顯 編『西田哲学を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九六年）
峰島旭雄 編著『東洋の論理―西田幾多郎の世界―』（北樹出版、一九八一年）
宮川透『近代日本思想の構造』（東京大学出版会、一九五六年）
――『三木清』（東京大学出版会、一九五八年）
――『近代日本の哲学　増補版』（勁草書房、一九六二年）
三宅剛一『人間存在論』（講談社学術文庫、二〇〇八年）
森清『大拙と幾多郎』（朝日新聞社、一九九一年）
森哲郎「西田幾多郎の「表現」思想」『理想　第六八一号　特集 西田哲学の諸問題』（理想社、二〇〇八年）
柳田謙十郎『実践哲学としての西田哲学』（弘文堂書房、一九三九年）
山内得立「『西田全集』の再刊に因んで」（旧版『西田幾多郎全集』「月報第一」）
山田邦男「西田哲学における哲学と宗教―禅の立場から―」『西田哲学会年報　第五号』（西田哲学会、二〇〇八年）
山田宗睦『昭和の精神史―京都学派の哲学―』（人文書院、一九七五年）
――『西田幾多郎の哲学―増補改題日本型思想の原像―』（三一書房、一九七八年）
山根理寛「西田哲学に映る諸思想家の像―索引とアンソロジー―」茅野良男・大橋良介 編『西田哲学―新資料と研究への手引き―』（ミネルヴァ書房、一九八七年）
湯浅泰雄『近代日本の哲学と実存思想』（創文社、一九七〇年）
行安茂『近代日本の思想家とイギリス理想主義』（北樹出版、二〇〇七年）
米山優「哲学が持ちうる芸術美とはどんなものか？」『西田哲学会年報　第六号』（西田哲学会、二〇〇九年）
『理想　第六八一号　特集　西田哲学の諸問題』（理想社、二〇〇八年）
ローベルト・シンチンゲル「西田哲学の翻訳のことなど」（旧版『西田幾多郎全集』「月報第六」）

渡辺和靖『明治思想史―儒教的伝統と近代認識論―』（ぺりかん社、一九七八年）

なお、本博士論文の各章は、すでに発表されている以下の諸論文に加筆・修正をして成立したものである。

第一章

「三木清における社会の位置―「形成的世界の形成的要素」論をめぐって―」『倫理学年報　第五七集』（日本倫理学会、二〇〇八年）

第二章

「自発自展する思想と文体―西田幾多郎の自覚の体系と「真の無」「絶対の無」をめぐる考察―」『倫理学紀要　第一六輯』（東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、二〇〇九年）

第三章

「人生の悲哀と「永遠の今」の歴史論の交点―西田幾多郎の死生観をめぐって―」『死生学研究　第一三号』（東京大学大学院人文社会系研究科、二〇一〇年）

「「創造的世界の創造的要素」としての「人間的存在」―西田幾多郎の歴史論をめぐって―」『西田哲学年報　第九号』（西田哲学会、二〇一二年）

第四章

「三木清における遺稿「親鸞」の位置付け」『日本思想史学　第四〇号』（日本思想史学会、二〇〇八年）

「三木清「人間学のマルクス的形態」」熊野純彦編・共著『日本哲学小史―近代一〇〇年の２０篇』（中央公論新社、中公新書、二〇〇九年）

「三木清の主体概念の研究のために」『倫理学紀要　第二一輯』（東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、二〇一四年）

論文の内容の要旨

論文題目　日本近代哲学における「個人」と「社会」
―西田幾多郎と三木清の比較から―

氏名　西塚俊太

本論文は、西田哲学と三木の思想との間にある相違に注目し、両者を対比的に検討することを通じて、日本近代哲学・思想の中で「個人」が「社会」や世界の形成に対して如何に位置付けられていたのか、つまり日本近代哲学・思想における「個人」像の一端を明らかにすることを主たる目的としている。

第一章では、三木の「形成的世界の形成的要素」論が、個としての人間と社会との相互形成関係を主として論じた上で、その形成関係を媒介とすることで人間と世界との関係性を指し示すものであることを明らかにする。すなわち、西田哲学においては自己の形成と世界の形成とが「即」という語で結ばれているのに対して、三木の論理においては個としての人間と世界とを媒介する「社会」の形成が重視されていることの意義と意味を検討していくことになる。

第一節の考察は、西田の「創造的世界の創造的要素」論においては、人間による形成と「創造的世界」の形成とが相即する形で捉えられているのに対して、三木の「形成的世界の形成的要素」論は、人間と世界との間の媒介項として環境や社会の形成を差し挟むことで、人間による形成的な行為から世界の形成を論じていることを明らかにしている。つまり、三木の思想の特徴を媒介性という点に見出していくことになる。

第二節においては、三木が世の中や世間という語によって表される領域をもって「閉じた社会」と呼んでおり、その「閉じた社会」における「ひと」は「他と連続的」なあり様をしている存在とされていることを、まず明らかにしている。その上で、三木は「閉じた社会」の考察のみでは社会のあり様を十全に捉えたことにはならないと考えていることを示し、第三節における「開いた社会」についての考察への導入としている。

第三節においては、三木が論じる「開いた社会」のあり様を把握していくことになる。この節における考察により、三木の「開いた社会」についての思想は「私と汝」論の形をとって展開されていることがまず確認される。そして三木の「私と汝」が、

他者との出会いにおいてはじめて相手が「汝」として現れ、その「汝」によって意識が自己へと回折することで「ひと」としての日常から「私」が析出されるという事態を論じたものであることが明らかとなる。

第四節の考察は、第一章のまとめとして、一方では「種」である「閉じた社会」という側面で「個」である人間による形成と関係させながら、他方では「類」である「開いた社会」という側面で「世界」の形成とのつながりにおいて捉えるというように、社会という一語に両様の含みを持たせてその矛盾を介することによって、三木は彼の「形成的世界の形成的要素」論において、人間による形成と世界の形成とを連絡させて描き出していることが示されることになる。

第二章の考察は、「純粋経験」の思想から「場所」の思想へと至る初期から中期の西田哲学が、無限に自己展開していく「自覚の体系」の論理化を目指したものであることを示すことになる。この章における考察は西田哲学の特徴が「自発自展する思想と文体」という点に存在することを明らかにしていくが、これは第一章で明らかにされた三木の思想における「社会」の媒介の重視という特徴と対比するに際して重要となるものである。

第一節においてまず、西田が哲学として表現しようとしているところのものを理解するためには、西田の経験を外部から導入するに先立って、また、西田哲学の性格を「東洋的「無の論理」」や「宗教的自覚の論理」と規定する手前で立ち止まって、まず西田の叙述に内在する形で「真の無」や「絶対の無」をはじめとする一つ一つの概念の意味を問うていく必要があることを提示している。

第二節では、西田の思想が、「自己の中に自己を写す」働きが自己言及的に作用して無限に自己展開していくという特徴を有していることを明らかにし、それを「自発自展する思想」という観点から論じていくことになる。

第二節における検討をうけて、第三節では、西田哲学における論理や文体が、言語による把捉を不断に逃れゆく「自発自展する思想」を捉えるための「自発自展する文体」として特徴付けられることを明らかにしている。

第二章の結論となる第四節は、「自発自展する思想と文体」という特徴を有する西田哲学を現代において論じるという営み自体のあるべきあり様について考察するものと

なっている。

第三章では、1930年代の西田の論考を中心的に検討することを通じて、まず西田の歴史論の論理構制とその問題性を示した上で、その歴史論と「私と汝」論との交点を跡付けていく。ついで、西田の論考において「真の我」「真の自己」が「創造的世界の創造的要素」として捉えられているそのゆえんを明らかにし、最終的に、西田の哲学が「人生の悲哀」と深く結び付いたものであることを示すことになる。

第一節においてまず、西田の「創造的世界の創造的要素」論が本来的に歴史論とは結び付きがたいものでありながら、それでもなお歴史論と結び付けながら展開されているという問題を指摘する。

第一節を受けて展開される第二節は、西田の歴史論が「永遠の今の自己限定の立場」から展開されていることの問題性を明らかにしていくことを主眼としている。

ついで、第三節では、西田の歴史論が「私と汝」論と結び付きながら展開されていることを明らかにし、西田の歴史論の論理構制を解き明かしていく。

第四節における考察は、西田が、互いに非連続的で絶対に他なる存在である「私」と「汝」が出会うことで「非連続の連続」としての時が成立し、「過ぎ去った汝としての過去」と「現在の私」が相逢うことにおいて歴史が成立すると考えていることを明らかにする。すなわち、西田は互いに絶対に他なるものである「私」と「汝」がそれでもなお相逢うということの内に歴史の成立の可能性を見出している、ということが明らかとなる。

第五節においては、世界を語ることが自己を語ることであり、自己の行為を語ることがとりもなおさず世界の創造を語ることになるという発想のもとに西田哲学が展開されていることがまず示される。ついで、生命の極限に立つ時のみ真に「人間的」な「存在」であると捉えられているからこそ、弛緩せずに創造的であり続けることが人間に求められることになるという、西田哲学における「当為」のあり様が解き明かされることになる。

第三章のまとめとなる第六節は、西田の歴史論と「私と汝」論が根柢において結び付いていることをまず明らかにする。つまり西田は、「永遠の今」や「絶対現在」から時が自己限定し歴史が成立していく契機を、互いに絶対に他なるものである私と汝が

それでもなお相逢うことの内に求めているのであり、この構想は死にさえも意味を見出そうとする西田の死生観に裏打ちされたものであることが明らかとなる。

第四章における考察は、三木の歴史論と社会論の検討を通じて、三木の思想が一貫して「人間学」という主題を扱うものであったことを示していくことになる。この章における考察により、『哲学的人間学』『哲学入門』『構想力の論理』などの著作の中で示されている三木の後期思想が、「主体」としての人間のあり様を論じるものである一方で、社会の独立をも基礎付けてしまう危険性を含んだものであったことが確認される。そして最終的に、三木の「個人」と「社会」に関する思想と死生観との結び付きが示されることになる。

第一節においてまず、三木の社会論が、人間の独立性を重視するものである一方で、社会の独立をも導いてしまう危険性を含むものであったことが確認される。

第二節では、論文「人間学のマルクス的形態」の読解を通じて、三木の思想が「人間学」に立脚しながら成立しているものであることを明らかにする。ついで、マルクス研究を通じて三木が社会論や歴史論を扱い得る論理を獲得していく過程を跡付けることになる。

第三節における考察は、処女作『パスカルに於ける人間の研究』から『歴史哲学』へといたるまでの三木の思想を検討することによって、三木の思想における「人間学」という主題の一貫性を確認し、三木の歴史論の論理構制を把握していくことになる。

第四節における考察は、三木の「人間学」を「主体論」という観点から検討することを通じて、三木の思想における「責任」のあり様を捉えることを主眼としている。

第五節においては、三木の思想が社会の独立をも導いてしまうその所以を把握するために、『構想力の論理』の中に見られる「自然の技術」「自然の構想力」についての議論を検討している。この節における考察により、三木の「形成的世界の形成的要素」論と「構想力の論理」との結び付きが解明されることになる。

最終第六節における考察は、三木の遺稿「親鸞」が、信仰の告白として書かれたものではなく、三木が一貫して主題としてきた「人間学」を論じる哲学的著作であることを明らかにし、最終的に、三木の個人・社会・世界に関する思想と死生観との関係を提示することになる。